台太郎遺跡

DAITARO SITE

―「フローラルアベニュー向中野」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書 ―

2012. 5

徳清倉庫株式会社

盛岡市教育委員会

例　　言

1．本書は、岩手県盛岡市向中野一丁目に所在する台太郎遺跡で実施した発掘調査の報告書である。

2．本書は、宅地造成に係る事前調査であり、記録保存を目的とした緊急発掘調査である。
　調査期間は、平成23年5月9日から平成23年7月21日、調査面積は4,360㎡である

3．本調査は、土地所有者である徳清倉庫株式会社　代表取締役社長　佐藤重昭氏と盛岡市教育委員会との間に締結された協定書に基づき、遺跡の学び館が野外調査および出土資料整理・報告書編集を行った。また、本調査に係る費用は、事業主体である佐藤重昭氏より支出された。

4．発掘調査および本書の執筆・編集は、盛岡市遺跡の学び館　佐々木亮二、三品花菜子が担当した。

5．遺構平面位置は日本測地系を用い、公共座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。
　台太郎遺跡　　調査座標原点　X－35,500・Y＋26,500　→　RX＋0　RY＋0

6．高さは標高値をそのまま使用している。

7．遺構記号は次のとおりである。

遺　構	記　号	遺　構	記　号	遺　構	記　号
竪穴住居跡	RA	土　坑	RD	焼土遺構	RF
掘立柱建物跡	RB	竪穴建物跡	RE	溝	RG

8．遺構番号については県埋文センター調査遺構番号と調整を図り、連続した共通番号を使用している。

9．調査および整理作業には、次の方々の協力を得た。（五十音順、敬称略）

[発掘調査・室内整理作業]

阿部正幸、大沼芳子、長内理恵、嘉嶽和男、川村久美子、熊谷あさ子、小林勢子、小松愛子、佐藤和子、佐藤公一、佐藤美智子、竹花栄子、谷藤貴子、千葉留里子、日野杉節子

[助言・協力]

岩手県教育委員会、佐藤重昭

10．発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。

目　　次

例　言
目　次
挿図目次
写真図版目次
Ⅰ　遺跡の環境……1
Ⅱ　調査成果……4
Ⅲ　総括……44

挿　図　目　次

第1図　台太郎遺跡位置図……1
第2図　地形分類と周辺の遺跡分布……3
第3図　台太郎遺跡全体図……5・6
第4図　台太郎遺跡第73次調査全体図……9
第5図　RA653竪穴住居跡……16
第6図　RA654竪穴住居跡（1）……17
第7図　RA654竪穴住居跡（2）……18
第8図　RA655竪穴住居跡……19
第9図　RA656竪穴住居跡（新1）……20
第10図　RA656竪穴住居跡（新2）……21
第11図　RA656竪穴住居跡（旧1）……22
第12図　RA656竪穴住居跡（旧2）……23
第13図　RA657竪穴住居跡……24
第14図　RA658・659竪穴住居跡……25
第15図　RA660竪穴住居跡（1）……26
第16図　RA660竪穴住居跡（2）……27
第17図　RA654竪穴住居跡出土遺物（1）……28
第18図　RA654竪穴住居跡出土遺物（2）……29
第19図　RA655竪穴住居跡出土遺物……30
第20図　RA656・657・659竪穴住居跡出土遺物……31
第21図　RA660竪穴住居跡出土遺物（1）……32
第22図　RE087・088竪穴建物跡……35
第23図　RE089・090竪穴建物跡……36
第24図　RE091・092・093竪穴建物跡……37
第25図　RA660竪穴住居跡（2）、RE092竪穴建物跡、RD2145土坑出土遺物……38
第26図　RB140掘立柱建物跡……46

第27図　ＲＤ2142～2150土坑……47
第28図　ＲＤ2151～2160土坑……48
第29図　ＲＤ2161・2162土坑、ＲＦ073焼土、ＲＧ606～611溝跡、ピット１～６ ……49
第30図　ＲＧ607・608溝跡出土遺物（１）……50
第31図　ＲＧ608溝跡出土遺物（２）……51

写 真 図 版 目 次

第１図版　北側調査区全景、南側調査区全景
第２図版　線刻画須恵器
第３図版　ＲＡ653～660竪穴住居跡
第４図版　ＲＥ087～093竪穴建物跡、ＲＢ140掘立柱建物跡、ＲＧ608溝跡
第５図版　台太郎遺跡第73次調査出土土器群　ＲＧ608溝跡出土かわらけ
第６図版　台太郎遺跡第73次調査出土　刀子・学引鉄・紡錘車・石製品・砥石・鍋円

○遺物の表現について

（1）　土器……土器の区分は、土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。
　　a　　土器の実測図・拓本の縮小率は1/3とした。
　　b　　挿図の土器の配列は器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
　　c　　土師器の黒色処理や彩色されたものは、網目（スクリーントーン）で表現した。
（2）　石器
　　a　　縮小率を1/3として器種ごとにまとめて配列した。
（3）　石製品・鉄製品
　　a　　縮小率を1/2とした。
（4）　挿図中の記号番号は、遺物の出土地点及び出土層位を表している。
　　（例）　ＲＡ001Ａ層　　→　ＲＡ001竪穴住居跡Ａ層より出土
　　（例）　Ｇ６－Ａ２０　Ⅲａ層
　　↓　　↓　　↓
　　※１　※２　　※３
※１　大グリッド……遺跡の全体を50ｍメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にＡ・Ｂ・Ｃ・・・のアルファベット、北から南には１・２・３・・・のアラビア数字を付し、Ａ６、Ｃ12など、両方の組み合わせでグリッド名を表した。
※２　小グリッド……大グリッドの中をさらに２ｍメッシュで区切り、北西隅を起点として西から東にＡ～Ｖのアルファベット、北から南に１～25のアラビア数字を付し、グリッド名は両方の組み合わせで表した。
※３　遺物の出土層位を示す。

○遺構の表現について

各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は一点鎖線で表し、掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。
土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』(1994 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

Ⅰ．遺跡の環境

１．地理的環境

遺跡の位置　台太郎遺跡は、盛岡市街地より南西約２kmの向中野地内に所在する（第１図）。かつては水田・畑・宅地などの農地が主体を占めていたが、近年は盛岡南新都市土地区画整理事業（盛南開発）区域内のため、急速に宅地化が進められている。遺跡の範囲は南北500m、東西750mと推定され、標高は119～123mである。現況は宅地および田畑である（第３図）。

地形・地質　盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。

雫石川は奥羽山脈より東流し、その流れは扇沼山と箱ヶ森に挟まれた北の浦（市内上太田）で急激に狭められ、その狭窄部を抜けて北上川と合流する。雫石川はこれまでに何度も流路を変えており、雫石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。台太郎遺跡はその沖積段丘上に立地している（第２図）。

この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりでなく、微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない雫石川の下刻が周辺山地からもたらす砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。雫石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは４条、そのほかにも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。それらに画された微高地上に遺跡が点在している。

第１図　台太郎遺跡位置図（1：100,000）

2．歴史的環境

周辺の遺跡　雫石川南岸の沖積段丘は市内本宮・太田・飯岡地区から矢巾町まで広がっており、数多くの遺跡が立地する。これまで縄文時代の遺物は少量発見されるものの、竪穴住居跡等の遺構の発見は少なかった。しかし、近年、盛南開発事業にともなう調査によって本宮熊堂A・B遺跡などで縄文時代晩期の竪穴住居跡が発見されるなど、次第に集落の様相があきらかになりつつある。弥生時代については遺物が少量発見されるものの、明確な遺構の検出はされていない。古墳時代の遺構・遺物も発見は少ないが、竹桑遺跡で古墳時代末の竪穴住居跡が確認されている。

古　代　奈良時代になると周辺の遺跡数は飛躍的に増加する。本遺跡南西の飯岡山東麓には終末期古墳の高館古墳群が、北西約5kmのところには太田蝦夷森古墳群が築造され、野古A遺跡、百目木遺跡、西鹿渡遺跡などで竪穴住居跡が増加する。平安時代（9世紀）になると志波城（803年）が造営され、この地域にも律令国家の支配が及ぶ。しかし、志波城は北側を流れる雫石川の度重なる水害のために、10年あまりでその機能を徳丹城（矢巾町）に移動させる。やがて、その徳丹城も9世紀中葉にはその機能が停止し、律令国家の拠点は鎮守府胆沢城（奥州市）に集約されるが、周辺の竪穴住居を主体とする集落はさらに増加する傾向にある。台太郎遺跡では600棟を超す竪穴住居跡が発見されており、当時のこの地域（志波）の最大集落であったと考えられる。また、9世紀後葉～10世紀前葉になると地域の拠点的な集落が出現し始める。志波城の北東の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡では規模の大きい官衙的な建物群が造られる集落が発見されており、在地有力者の拠点と考えられる。

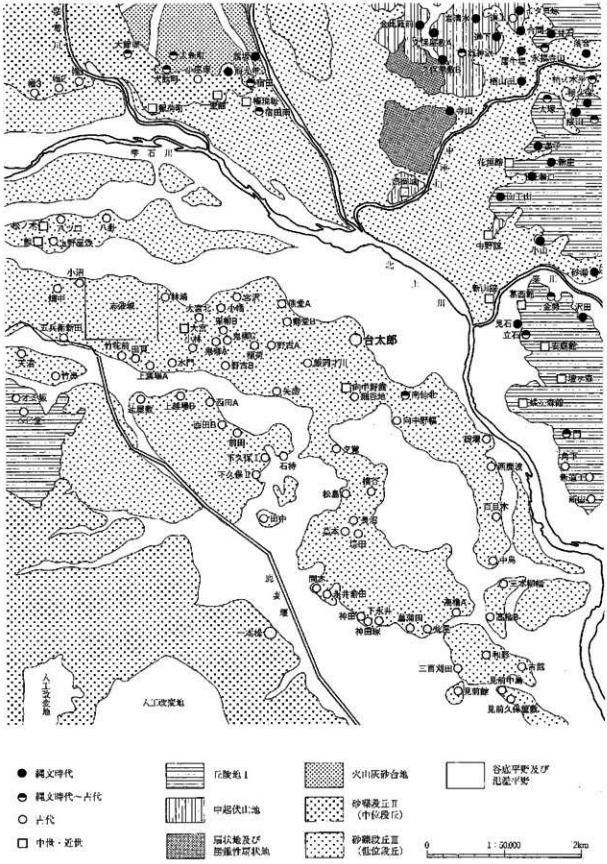
10世紀後半から12世紀までの遺跡は非常に少ないが、大新町遺跡や上宮頭遺跡、高松神社裏遺跡では10世紀後半頃の掘立柱建物や竪穴と土器が出土している。12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は堰根遺跡や稲荷町遺跡で確認されている。また、平泉藤原氏の影響下にあったと考えられる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑の大甕が出土しているほか、湯殿経塚からは常滑の三筋文壺、一本松経塚からは瀬戸の壺が発見されている。大宮遺跡では大溝から12世紀～13世紀のかわらけが出土している。

中　世　鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏と斯波氏の衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のものと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしのいい場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。台太郎遺跡周辺では、南側の向中野館遺跡や矢盛遺跡で居館跡と考えられる遺構が発見されている。

近　世　現在の城下の町並みの形成は、南部氏の盛岡城築城から始まる。

九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不来方城において、この不来方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。その後、慶長3年（1598）より盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。石垣補修に係る発掘調査により、盛岡城は1～5期の変遷を経て現在に至っていることが明明している。

盛岡城は当初の基本的縄張りに浅野長政が関わり、実際の築城工事には前田利家の家臣内堀伊豆世親式が奉行並として参画していたことから、戦国期の北奥地域の城館とは大きく異なり、総石垣の豊臣系城郭として国内最北の事例となっている。



第２図　地形分類と周辺の遺跡分布

Ⅱ．調査成果

1．これまでの調査

発見の経緯　台太郎遺跡は、昭和60年度の仙北西地区区画整理事業時の工事現場にて、平安時代の竪穴住居跡が発見され周知された遺跡である。平成５年度からは、盛南開発事業にともなう発掘調査が主体を占め、以後74次にわたって調査されている。

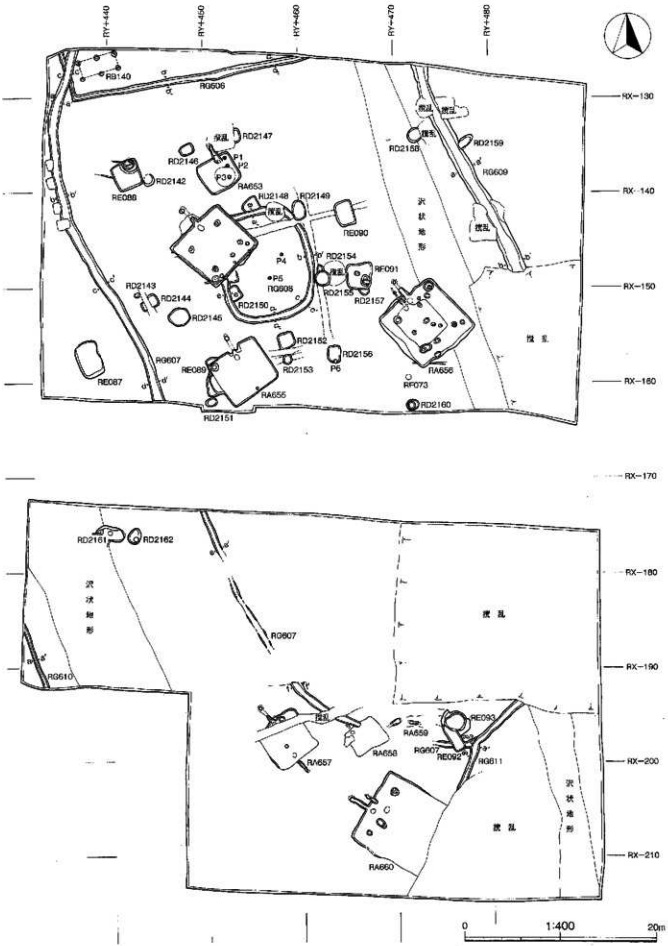
これまでの県埋文センター・市教委の発掘調査により、７世紀～10世紀の古代集落、中世の居館を中心とした集落跡や墓域、近世の村落跡などが確認されている。

古代（奈良・平安時代）の竪穴住居跡は600棟以上を数え、そのほかに掘立柱建物跡（２×２間総柱）や大溝などが確認されており、当時の「志波（斯波）」地域最大の集落といえる。遺構の分布をみると、７世紀末～８世紀の竪穴住居跡は、いくつかの群をつくりながら南西部を除く遺跡全域に分布し、重複はみられない。それに対し、９世紀～10世紀の竪穴住居跡は、遺跡の西部と中央～北部の段丘縁辺部に分布が集中し、多くの重複がみられる。個別の竪穴住居跡の特徴をみると、７世紀末～８世紀は北西カマドが圧倒的で北東～南カマドもわずかにあるが、カマドの作り替えは少ない。９世紀～10世紀は北西～北カマド、南東カマドなどさまざまで、大型住居にカマド作り替えが多い。

中世（鎌倉～戦国時代）になると、12世紀後半の瀧美の灰釉小型壺が遺跡北東より単独出土している。遺跡の立地状況と遺物の年代から推測すると、経筒外容器として経塚に納められていたものと考えられる。13世紀後半には、遺跡中央部に不整五角形プランの在地領主の居館が営まれ、周辺域にはこれに関連する区画溝や道路跡、掘立柱建物跡、竪穴建物跡等が分布している。また、遺跡南部には中世の土坑墓群、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、さらに現在の「諏訪神社」の周囲を囲むような堀跡や、社殿または仏堂らしい掘立柱建物跡も確認されている。これらは出土した陶磁器の年代から15世紀頃まで存続したと考えられる。居館北東側には幅６ｍ内外で並行する道路側溝状の溝跡があり、この溝の東側には並行して区画整理工事前の道路も存在していた。この道は、遺跡北東部の段丘崖や居館の堀、周辺の区画溝とも並行しており、居館や周辺村落と並存していた道路跡と考えられる。また、本遺跡の南方には、向中野館遺跡（北館、南館）が存在しているが、館跡を構成する曲輪が方形を基調としたプランであることや、北館付近では堀や土橋、小さな曲輪などの複雑な配置であることから、およそ16世紀を中心とした年代が考えられる。

近世（江戸時代）には雫石川は現在の流れとなり、山河道の東側には奥州道中（街道）が通じ、城下の玄関口にあたる仙北組丁が開かれる。これにより向中野はこの町の郊外となった。この時代の遺構としては、掘立柱建物跡の曲屋跡や直屋跡などが遺跡内に点在するようになる。水田地帯の中に農家が点在する近世の「向中野村」の一部と考えられる。

第３図　台太郎遺跡全体図



第４図　台太郎遺跡第73次調査全体図

2．平成23年度の調査

調査経過　当該区域について土地所有者から店舗建築および宅地造成に係る事前協議があり、平成23年3月1日付けで発掘届が提出された。これを受けて同年4月4日～5日にかけてトレンチによる試掘調査を行った。その結果、計画区域全域において平安時代の竪穴住居跡や溝跡が確認され、工事着手前の緊急発掘調査が必要となった。平成23年4月28日、土地所有者と盛岡市教育委員会教育長との間で「埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、遺跡の学び館が調査を行った。調査期間は平成23年5月9日～7月21日、調査面積は4,360㎡である。

3．遺構の検出状況

第73次調査区は遺跡の南東端に位置し、西から東にかけての緩やかな斜面となっており、標高値は119m前後である。遺構は暗褐色シルト～黄褐色シルト層上面で検出した。

検出遺構　確認された遺構は、平安時代の竪穴住居跡8棟、竪穴建物跡7棟、古代以降の土坑21基、溝跡4条、焼土遺構1基、中世の溝跡1条、時期不明の掘立柱建物跡1棟、溝跡1条である。

4．古代の遺構・遺物

ＲＡ653竪穴住居跡（第5図）

位　置　北調査区北西　　**平面形**　方形　　**主軸方向**　N28.5°W　　**重複関係**　なし

規　模　北西―南東3.56m×南西―北東3.93m　　**掘込面**　削平　　**検出面**　暗褐色シルト層

埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを粒状に含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.04～0.10mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。構築土（L層）は暗褐色土を主体に黒褐色シルト質埴壌土を粒状に少量含む。厚さは0.02～0.18mをはかる。

カマド　北西壁東寄りに構築され、煙道平面形は溝状で断面は楕円形を呈する。燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がる。規模は、焚口から煙出し先端までの長さ2.3m、幅0.32m～0.52m、検出面から煙出し底面までの深さは0.52mをはかる。煙道内から燃焼部にかけてカマド崩壊土（J層）が堆積している。J_1層は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトと焼土を少量含む。J_2層は黄褐色シルトを主体とし、粒～塊状の黒褐色土と粒状の焼土を含み、J_3層は黒褐色土を主体として、黄褐色シルトと焼土を粒状に少量含む。カマド基底部は残存していない。火床面は0.37×0.28mの不整円形を呈する。

出土遺物　あかやき土器、土師器の小破片が出土。

ＲＡ654竪穴住居跡（第6・7図）

位　置　北調査区北西　　**平面形**　方形　　**主軸方向**　N42°W

重複関係　ＲＧ608溝跡に切られる。

規　模　北西―南東6.22m×南西―北東6.73m　　**掘込面**　削平　　**検出面**　暗褐色シルト層

埋　土　自然堆積による。A～C層に大別される。

A層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微量に含む。

B層—黒褐色土を主体とし、層状の黄褐色シルトと粒状の黒褐色土を少量含む。

C層—暗色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと焼土・炭化物を多量に含む。2層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.30～0.50mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。構築に、幅0.07～0.21m、深さ0.05～0.16mの周溝がめぐる。構築土（L層）は黄褐色シルトを主体に、粒～塊状の黒褐色土を少量含み、厚さは0.04～0.11mである。

カ マ ド　北西壁中央に構築され、煙道平面形は刳り貫きのトンネル状で断面は楕円形を呈する。天井部分が残存しており、燃焼部から煙道中央部にかけてやや上がり、煙出しに向かって緩やかに下がる。規模は、焚口から煙出し先端までの長さ3.34m、幅0.50m～0.63m、検出面から煙出し底面までの深さは0.78mをはかる。煙道内から燃焼部にかけてカマド崩壊土（J層）が堆積している。J_1層は黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと焼土を少量含む。J_2層は黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微量に、焼土を少量含む。J_3層は黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黒色土と黄褐色シルトを少量含む。J_4層は黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと層状の焼土を少量含む。

燃 焼 部　カマド基底部は残存しておらず、火床面のみが残されている。火床面は0.49×0.69mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.04mを測る。

柱　穴　床面から11口のピットを検出した。それぞれの床面からの深さはP1－0.54m、P2－0.56m、P3－0.48m、P4－0.37m、P5－0.52m、P6－0.48m、P7－0.62m、P8－0.34m、P9－0.19m、P10－0.35m、P11－0.69mである。

出土遺物（第17・18図1～19）　1は須恵器の坏で底部は回転糸切無調整である。2～4はいずれもあかやき土器の坏である。2は全体に二次焼成を受けている。5は耳皿で、高台部分と半分が欠損し、二次焼成を受けている。6は土師器の底部回転ヘラケズリの坏である。内外に黒色処理が施されているが、調整痕は磨滅している。7は須恵器の短頸壺である。8は須恵器の長頸瓶である。9は須恵器の甕である。体部内外面にカキメが施されている。10・11は同一個体の須恵器甕である。口縁部直下に波状文が施され、その下部に動植物を表したと考えられる線刻画が描かれている。12・13は同個体の須恵器の甕であり、体部の内外にはタタキが施されている。14は土師器の甕である。底部は砂底で、体部の内外面にヘラナデが施されている。15は紡錘車で、半分のみ残存している。16・17は刀子である。18は搗臼で、材質は凝灰岩である。19は三面を使用した砥石で、材質は凝灰岩である。

ＲＡ655竪穴住居跡（第８図）

位　　置　北澗奇区南西側　　**平 面 形　方形**　　**主軸方向**　N28.5°W

重複関係　ＲＥ089に切られる。

規　　模　北西－南東5.34m×南西－北東5.75m　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層

埋　　土　A層—黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。2層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.2～0.28mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。構築土（L層）は、黄褐色シルトを主体に粒～塊状の黒褐色土を微量に含み、厚さは0.02～0.28mである。

カ マ ド　北西壁中央に構築され、煙道平面形は刳り貫きのトンネル状で、断面は不整円形を呈する。天井部分が残存しており、燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がる。規模は、焚口から煙出し先端までの長さ3.16m、幅0.29m～0.4m、煙出しの検出面から底面までの深さは0.74mをはかる。

煙道内から燃焼部にかけてカマド崩壊土（J層）が堆積している。J_1層はにぶい黄褐色シルトを主体とし、粒状の黒褐色土を少量含む。J_2層は黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと黒色土を少量含む。J_3層は灰黄褐色シルトを主体とし、粒状の黄褐色シルトを少量と黒褐色土を多量に含む。J_4層は黒褐色土を主体とし、粒～塊状のにぶい黄褐色シルトと焼土を少量含む。J_5層は黒褐色土を主体とし、粒状の黒色土を微量に含む。

燃焼部　カマド基底部は残存していないが、壁面が内側に突出している部分があり、地山を削り出して基底部の一部として使用していたと考えられる。火床面は0.5×0.57mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.04mである。

柱穴　床面から2Lのピットを検出した。床面からの深さはP1－0.32m、P2－0.13mである。

出土遺物（第19図1～11）　1～3はあかやきの坏である。1は二次焼成を受けており、器面が摩滅している。3は体部に縦位の線刻が10本刻まれている。4は土師器の高台付坏である。内面の黒色処理が二次焼成によりはじけている。体部下端にはヘラケズリが施されている。5～9は土師器の坏である。5は被熱により内面の調製痕が不鮮明となっている。6は口縁部外面にもミガキが施されている。10は土師器の甕である。口縁部は内外面ユビナデ、体部外面は縦に、内面は横にヘラナデが施される。11は敲石である。長軸両端部が使用され、材質は安山岩である。

RA656（新・旧）竪穴住居跡（第9～12図）

位置　北調査区南東　　**平面形**　方形　　**主軸方向**　（旧）N37°W　（新）N40°W

重複関係　なし

規模　（旧）北西－南東4.70m×南西－北東4.04m　（新）北西－南東7.54m×南西－北東7.30m

掘込面　削平　　**検出面**　暗褐色シルト層

埋土　自然堆積による。A～B層に大別される。

A層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと焼土を少量含む。3層に細別される。

B層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の焼土を多量に含む。

壁の状態　新住居の壁は検出面から床面までの深さは0.32～0.42mで、外傾して立ち上がる。旧住居の壁は削平されている。

床の状態　床面はほぼ平坦である。新住居の梅築土（L1層）は黒褐色土を主体に、粒～塊状の黄褐色シルトを多量に含み、厚さは0.02～0.26mである。L2層は暗褐色土を主体として黄褐色シルトと明黄褐色土を少量含む。旧住居の構築土であるL3層は、黄褐色シルトを主体として黒褐色土を少量含む。

カマド　カマドは新旧2時期ある。旧期のカマドは、北西壁に構築され、煙道平面形は割り貫きのトンネル状で、断面は楕円形を呈する。天井部分が残存しており、燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がっている。規模は、焚口から煙出し先端までの長さ2.89m、幅0.29m～0.34m、煙出し検出面から底面までの深さは0.80mである。煙道内から燃焼部にかけてカマド崩壊土（J層）が堆積している。J層は黒褐色土を主体として、粒状の黄褐色シルトと焼土を少量含む。4層に細別される。

新期のカマドは、北西壁中央に構築され、煙道平面形は割り貫きのトンネル状で、断面は不整円形を呈する。天井部分が残存しており、燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がる。規模は、火床面から煙出し先端までの長さ3.48m、幅0.33m～0.40m、煙出しの検出面から底面までの深さは0.86mをはかる。煙道内から燃焼部にかけてカマド崩壊土（J層）が堆積している。J層は、

黒褐色土を主体として粒～塊状の黄褐色シルトと焼土を少量含む。6層に細別される。

燃焼部　新住居のカマド基底部は左側が残存している。旧住居のカマド基底部は残存しておらず、火床面のみが残されている。新住居の火床面は0.64×0.66mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.10mである。旧住居の火床面は0.50×0.55mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.12mをはかる。

柱　穴　新住居の床面から10口のピットを検出した。床面からの深さはP1－0.50m、P2－0.55m、P3－0.45m、P4－0.67m、P5－0.53m、P6－0.18m、P7－0.32m、P8－0.29m、P9－0.23m、P10－0.42mである。旧住居の床面から4口のピットを検出した。床面からの深さはP1－0.13m、P2－0.13m、P3－0.20m、P4－0.17mである。

出土遺物（第20図1～9）　1・2は回転糸切り無調整の須恵器の坏である。3はあかやき土器の小形甕である。4は土師器の坏で、内外面に黒色処理後ヘラミガキが施されているが、磨滅により調整痕は不鮮明である。5・6はあかやきの甕である。5は、体部内面にハケメ、外面にヘラケズリが施される。6は体部内外面にヘラナデが施されているが、外面は摩滅している。7・8は土師器の小形甕である。7は口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にヘラナデが施されている。8は体部内面にヘラナデ、外面にヘラケズリが施されている。9は板状を呈し、左端の1釘穴には釘が残存している。帯引鉄か。

ＲＡ657竪穴住居跡（第13図）

位　置　南関東区中央南　　**平面形**　方形　　**主軸方向**　（旧）S43°E　（新）N41°W

重複関係　なし

規　模　北西－南東4.96m×南西－北東4.90m　　**掘込面**　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　後世の削平によりほとんど残存していないが、A～B層に大別される。

A層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと明黄褐色シルトを微量に含む。

B層―黒褐色土を主体とし、微量の黄褐色シルトと塊状の焼土を少量含む。

壁の状態　削平によりほとんど残存しておらず、検出面から床面までの深さは0.08mである。

床の状態　床面はほぼ平坦である。構築土（L層）は、黄褐色シルトを主体に粒状の黄黒褐色土を微量に含み、厚さは0.02～0.19mである。

カマド　カマドは新旧二つある。旧カマドは、南東壁中央に構築され煙道平面形は溝状である。燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がる。規模は、焚口から煙出し先端までの長さ2.57m、幅0.28m～0.39m、検出面から底面までの深さは0.48mをはかる。煙道内には人為的に掘められた土（A'層）が堆積している。A'層は黄褐色シルトを主体として、粒状の黒褐色土を少量含む。2層に細別される。

新カマドは南西-北東壁北側に構築され、煙道平面形は刺り貫きのトンネル状で、断面は楕円形を呈する。天井の大部分は崩落しており、燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がる。規模は、火床面から煙出し先端までの長さ2.36m、幅0.39m～0.53m、煙出しの検出面から底面までの深さは0.57mをはかる。煙道内にはカマド崩壊土（J層）が堆積している。J_1層は黒褐色土を主体とし、粒～塊状の焼土を少量含む。J_2層は黒褐色土を主体とし、塊状の焼土を少量含む。J_3層は黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土を少量と焼土を微量に含む。

燃焼部　新旧カマド共に基底部は残存しておらず、火床面のみが残されている。旧カマドの火床面は0.40×0.40mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.06mである。新カマドの火床面は0.18×0.32mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.04mを測る。

柱　穴　床面から3口のピットを検出した。床面からの深さはP1－0.30m、P2－0.18m、P3－0.14mである。

出土遺物（第20図10～12）　10は須恵器の坏で、焼成時の熱により口縁部に歪みが生じている。11は土師器の坏で、内面は黒色処理とヘラミガキが施されている。口縁部外面にも横位のミガキが施されている。12は環状石製品の未製品である。材質は凝灰岩である。

RA658竪穴住居跡（第14図）

位　置　南調査区中央南側　　平面形　方形　　主軸方向　（旧）E30°N　（新）N27.5°W

重複関係　RG607に切られる。　　規　模　南西－北東3.50m　　掘込面　削平

検出面　黄褐色シルト層

埋　土　削平により残存していない。

壁の状態　削平により残存していない。

床の状態　床面はほぼ平坦である。構築土（L層）は、黄褐色シルトを主体に粒～塊状の黒褐色土を多量に含み、厚さは0.04～0.18mである。

カマド　カマドは新旧二つある。旧カマドは、北東壁中央に位置する。刳り貫きのトンネル状であるが、後世の削平により天井部はほとんど残存していない。規模は、残存部分から煙出し先端までの長さ1.36m、幅0.35m～0.50m、煙出しの検出面から底面までの深さは0.31mである。煙道内には人為的に埋められた土（A層）が堆積している。A_1層は、黄褐色シルトを主体として粒～塊状の黒褐色土を少量含み、A_2層は黒色土を主体として粒状の黄褐色シルトを微量に含む。

新カマドは北西壁西寄りに構築され、煙道平面形は溝状である。削平により、ほとんど残存していない。規模は、火床面から煙出しの残存している部分までの長さ1.50m、幅0.12m～0.23mである。煙道内にはカマド崩壊土（J層）が若干堆積しており、J層は、明黄褐色シルトを主体として粒～塊状の褐色シルトと黒褐色土を少量、焼土を微量に含む。

燃焼部　新旧カマド共に基底部は残存しておらず、新カマドの火床面のみが残されている。新カマドの火床面は0.31×0.36mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.08mを測る。

柱　穴　なし。

出土遺物　土師器の小破片が出土。

RA659竪穴住居跡（第14図）

位　置　南調査区南東　　平面形　不明　　主軸方向　W7°N　　重複関係　なし

規　模　煙道の部分のみ残存　　掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層

埋　土　後世の削平によりほとんど残存していないが、A層は黒褐色土を主体に粒状の黄褐色シルトを含む。2層に細別される。

煙　道　煙道の規模は、残存部分から煙出し先端までの長さ1.26m、幅0.21m～0.32m、検出面から底面までの深さは0.28mをはかる。

出土遺物（第20図13）　13は土師器の甕で、口縁部にユビナデ、体部内外面にヘラナデが施される。

RA660竪穴住居跡（第15・16図）

位　置　南調査区南　　平面形　方形　　主軸方向　（旧）N37°W　（新）N59°W

重複関係　なし

規　模　北西－南東7.80m（南東側は攪乱により削平）×南西－北東8.26m　　**掘込面**　削平

検出面　黄褐色シルト層

埋　土　A層は黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒～塊状に少量含む。

壁の状態　削平によりほとんど残存しておらず、検出面から床面までの深さは0.08mである。

床の状態　床面はほぼ平坦である。構築土（L層）は部分的にみられ、黒褐色土を主体に粒～塊状の黄褐色シルトを多量に、粒～塊状の明黄褐色土を少量含み、厚さは0.03m～0.21mである。

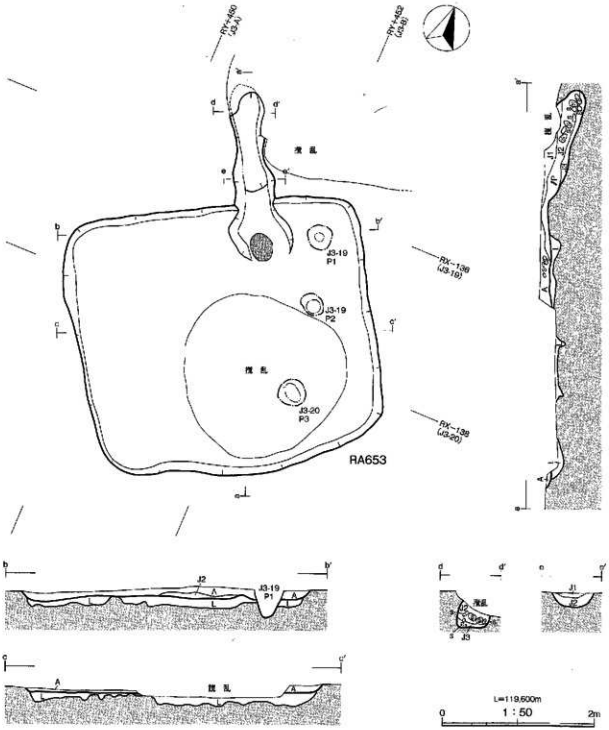
カマド　カマドは新旧二つある。新旧ともに北西壁中央に構築され煙道平面形は溝状であるが、本来は刳り貫きのトンネル状だったと考えられる。旧カマドは燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がる。規模は、焚口から煙出し先端までの長さ3.02m、幅0.25m～0.49m、煙出しの検出面から底面までの深さは0.67mをはかる。住居の拡張の際に旧カマドが人為的に埋められたため、煙道内には構築土（L_1～L_3層）が堆積している。L_1層は、黒褐色土を主体に粒～塊状の黄褐色シルトと、粒～塊状の明黄褐色土を少量含む。L_2層は黒色土を主体として粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。L_3層は黄褐色シルトを主体として粒～塊状の黒褐色土を少量含む。

新カマドは燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下がっている。規模は、焚口から煙出し先端までの長さ3.20m、幅0.43m～0.56m、検出面から煙出し底面までの深さは0.74mである。煙道内から燃焼部にかけてカマド崩壊土（J層）が堆積している。J層は黒褐色土を主体として、粒～塊状の黄褐色シルトと焼土を少量含む。4層に細別される。煙出しの底面には土師器甕（第21図5）が置かれていた。

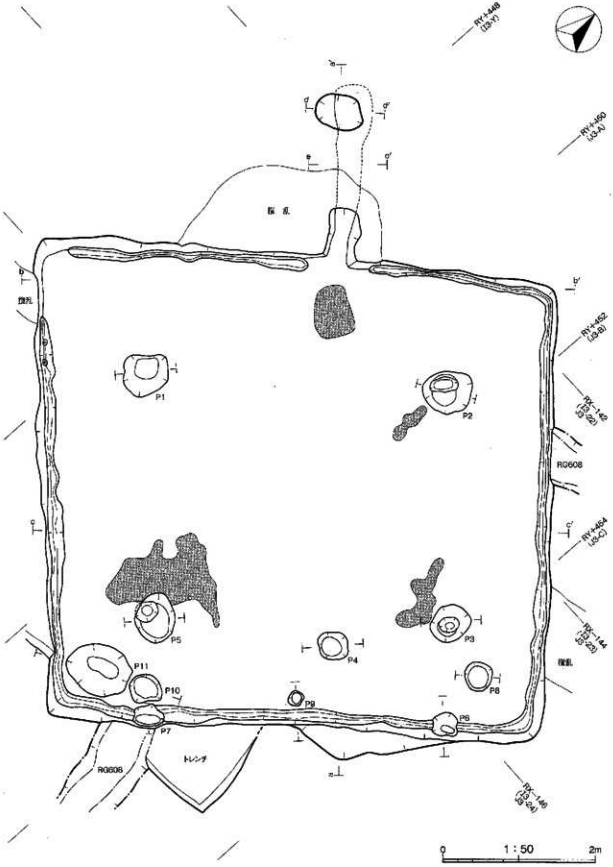
燃焼部　新旧カマド共に基底部は残存しておらず、火床面のみが残されている。旧カマドの火床面は0.48×0.73mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.03m～0.09mである。新カマドの火床面は0.46×0.53mの不整円形で、熱浸透層の厚さは0.11mを測る。

柱　穴　床面から3口のピットを検出した。床面からの深さはP1－0.37m、P2－0.43m、P3－0.69mである。

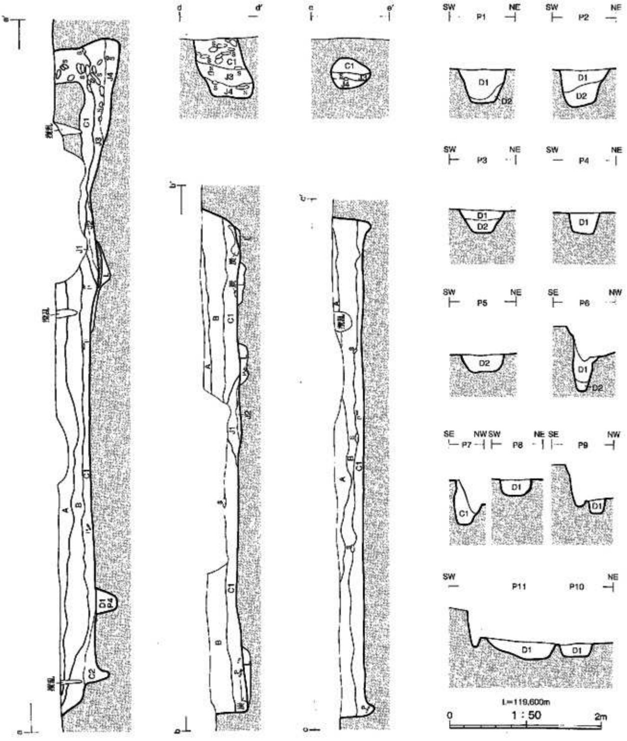
出土遺物（第21図1～9、第25図10）　1は回転糸切りの無調整の須恵器の坏である。2は土師器の高台付坏である。内外に黒色処理がされ、内面はヘラミガキを施している。3は土師器の坏で、内面に黒色処理とヘラミガキを施している。4は須恵器の甕である。5～10は土師器の甕である。5は口縁部にナデ、体部内外面にヘラナデが施されている。6・7は口縁部にナデ、体部内面にヘラナデ、外面にヘラケズリが施されている。8は口縁部にユビナデ、体部内面にヘラナデ、外面にヘラナデとヘラケズリが施される。9は体部内面にヘラナデ、外面にヘラケズリが施され、底部は砂底である。10は、胴部内外面にヘラナデが施されている。



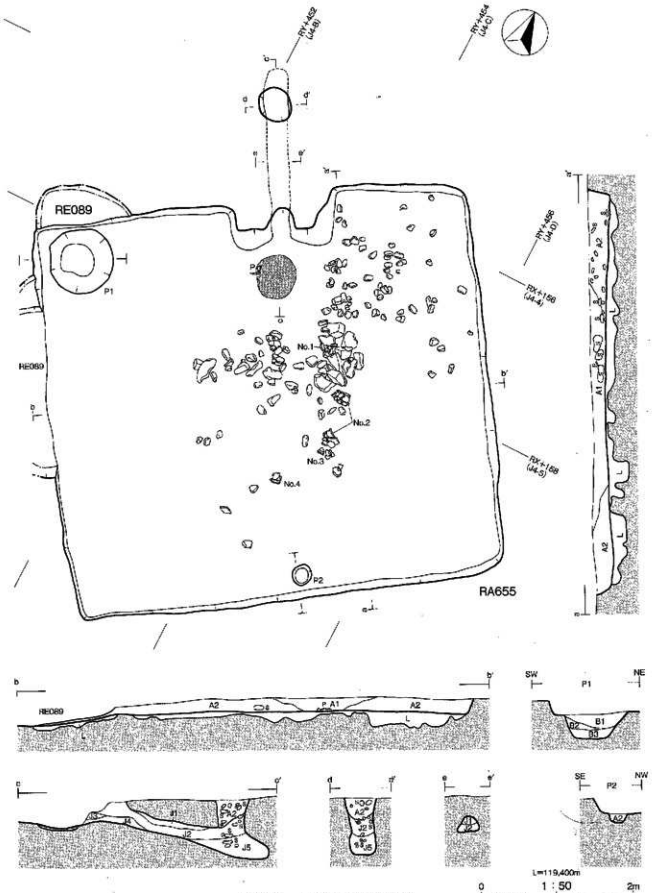
第５図　ＲＡ653竪穴住居跡



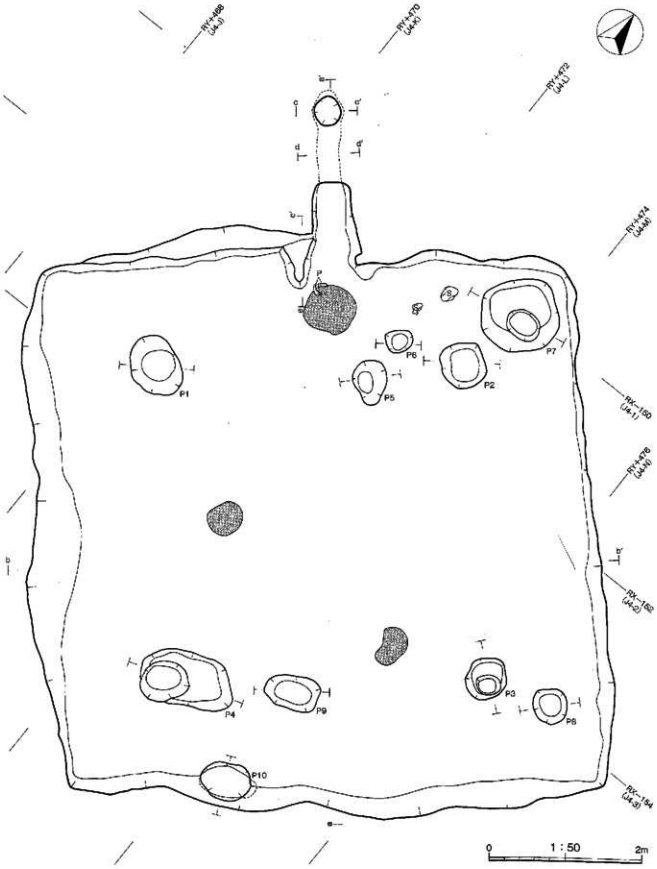
第6図　ＲＡ654竪穴住居跡（1）



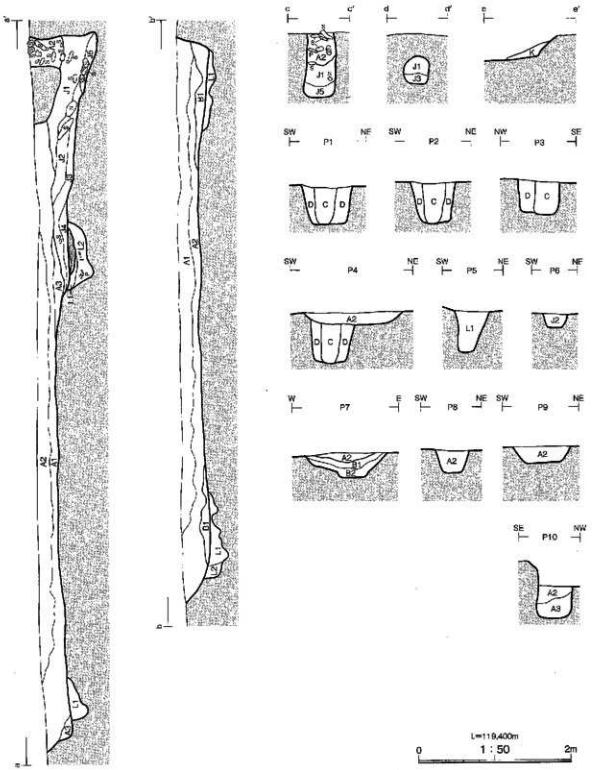
第７図　ＲＡ654竪穴住居跡（２）



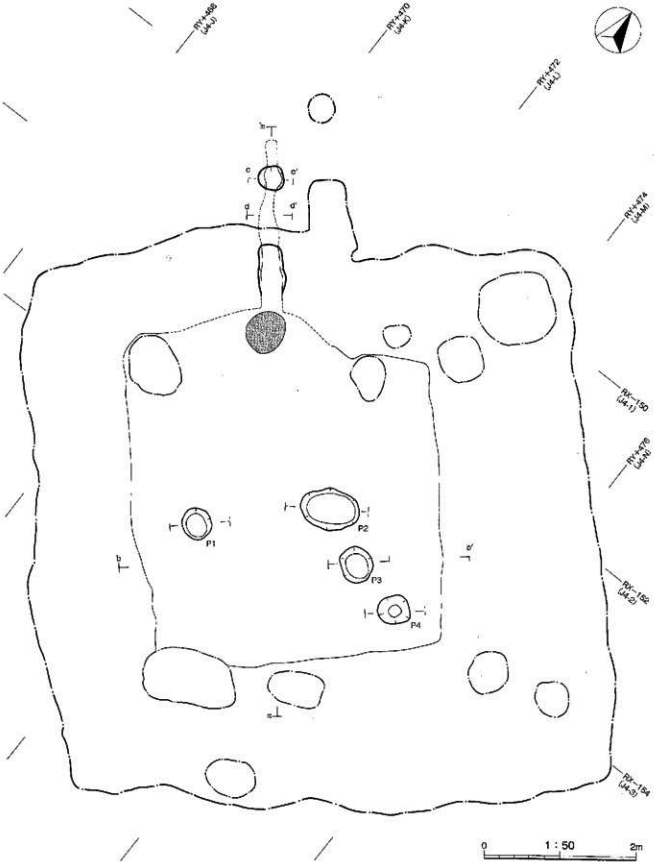
第8図　ＲＡ655竪穴住居跡



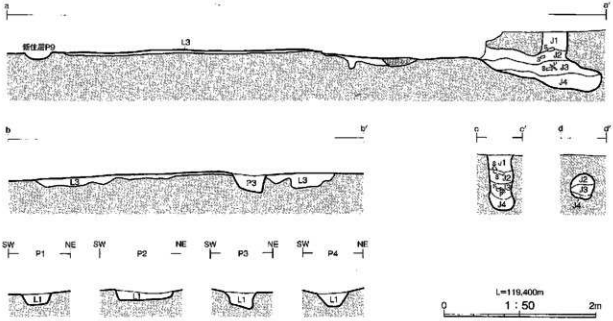
第９図　ＲＡ656竪穴住居跡（新１）



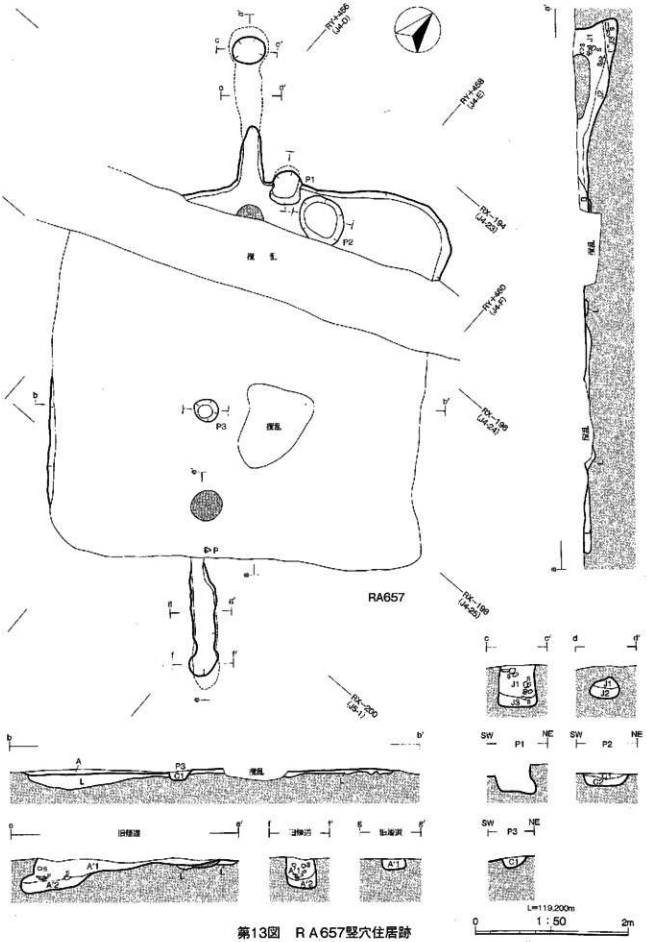
第10図　ＲＡ656竪穴住居跡（新２）



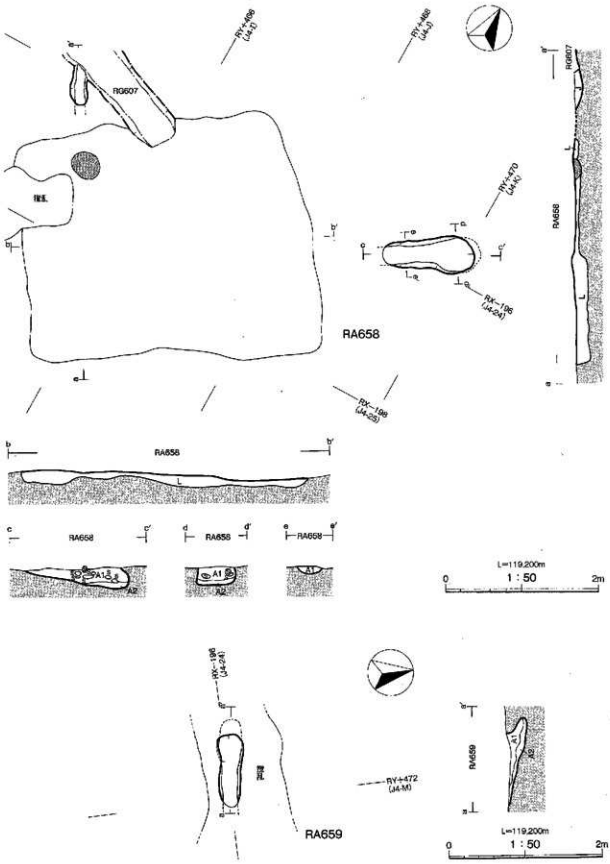
第11図　ＲＡ656竪穴住居跡（旧１）



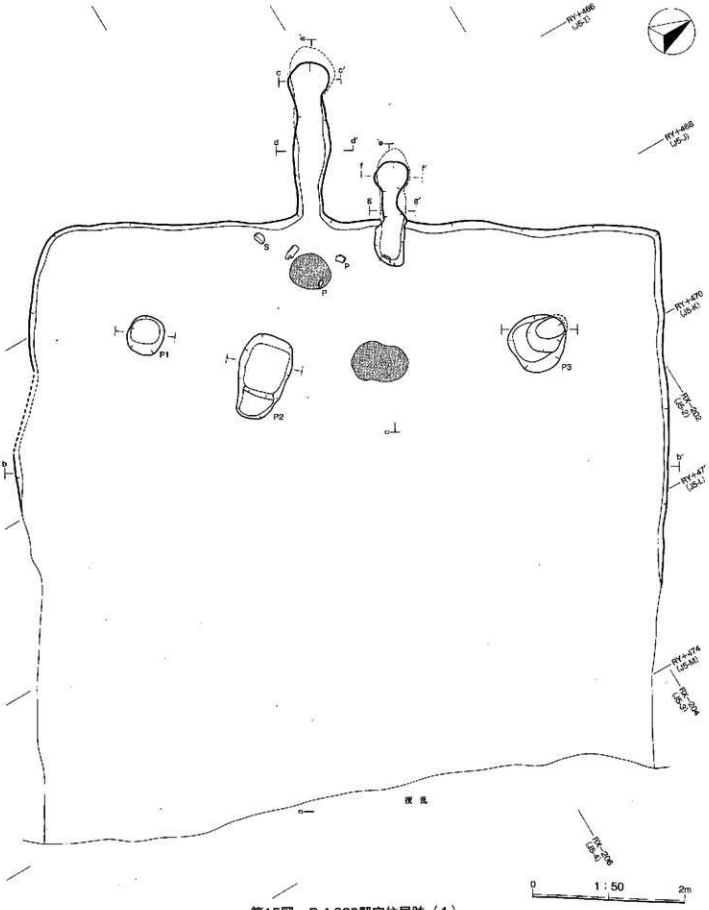
第12図　ＲＡ656竪穴住居跡（旧２）



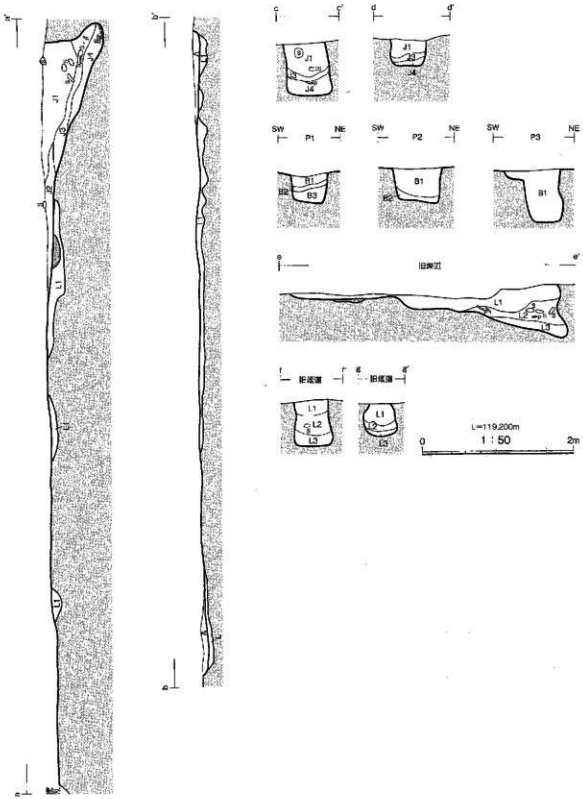
第13図　ＲＡ657竪穴住居跡



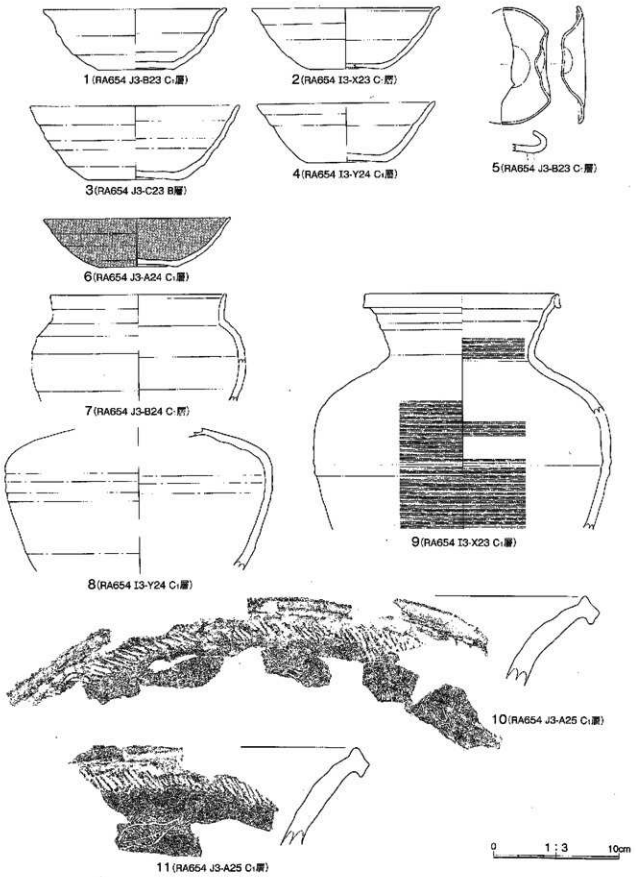
第14図　ＲＡ658・659竪穴住居跡



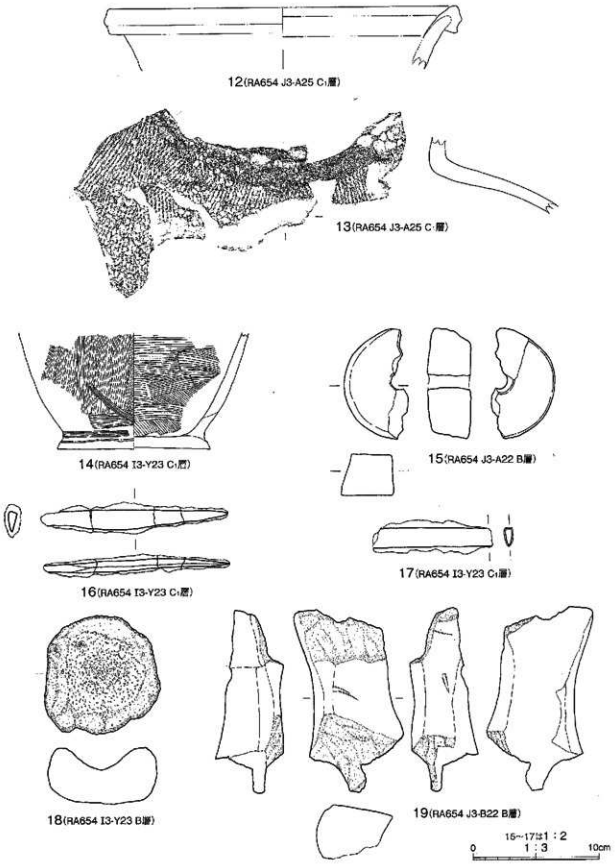
第15図　ＲＡ660竪穴住居跡（1）



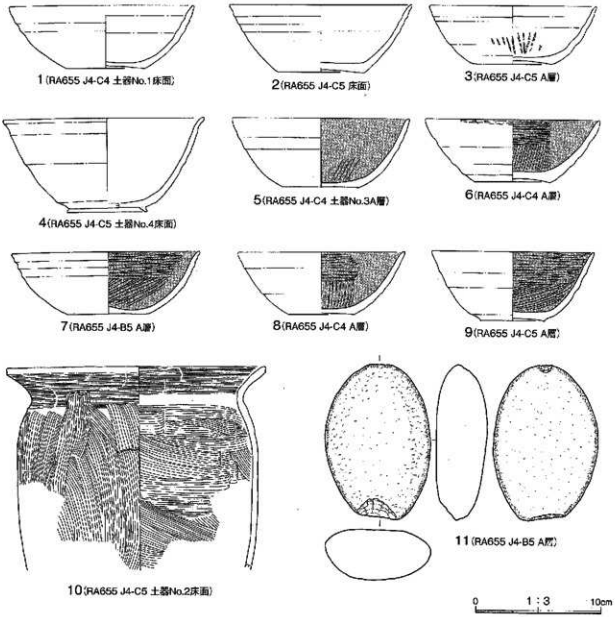
第16図　ＲＡ660竪穴住居跡（２）



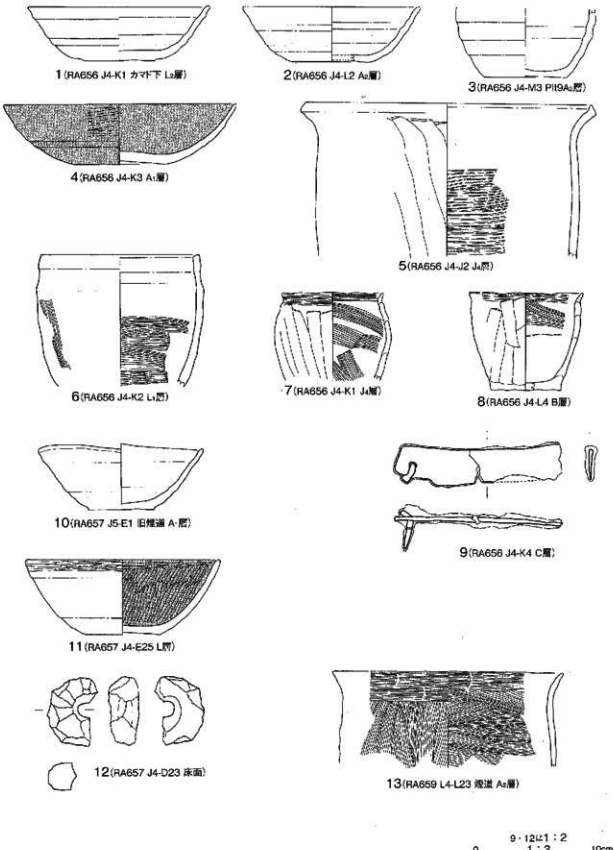
第17図　ＲＡ654竪穴住居跡出土遺物（1）



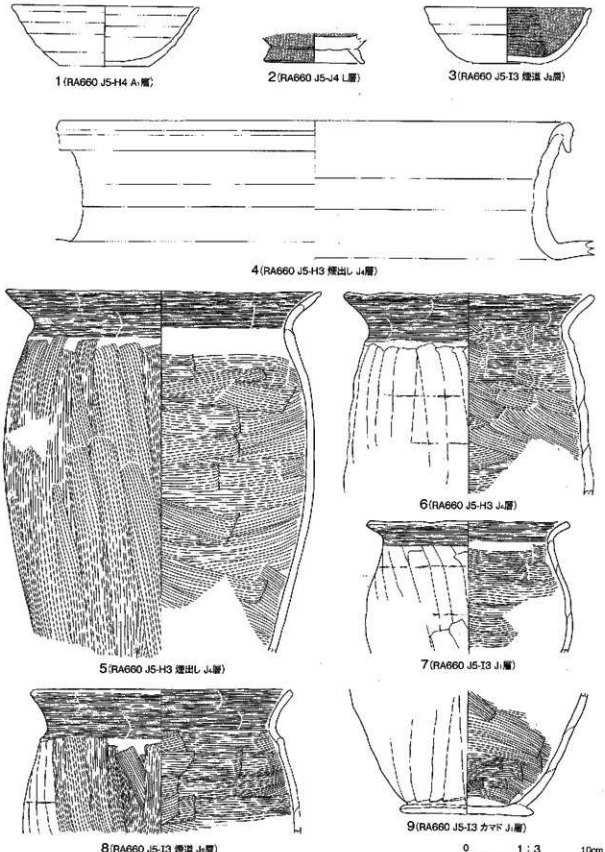
第18図　ＲＡ654竪穴住居跡出土遺物（２）



第19図　ＲＡ655竪穴住居跡出土遺物



第20図　ＲＡ656・657・659竪穴住居跡出土遺物



第21図　ＲＡ660竪穴住居跡出土遺物（1）

ＲＥ087竪穴建物跡（第22図）

位　　置　北調査区西側　　平面形　方形　　重複関係　なし

規　　模　北西－南東3.80m×南西－北東2.47m　　掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層

埋　　土　自然堆積による。Ａ～Ｃ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒状の明黄褐色シルトを微量に含む。２層に細別される。

Ｂ層―黄褐色シルトを主体とし、少量の粒～塊状の黒褐色土と、粒状の明黄褐色シルトを微量に含む。４層に細別される。

Ｃ層―黄褐色シルトを主体とし、粒状の明黄褐色シルトを少量含む。

Ｄ層―黒褐色土を主体として、黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.65～0.70mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。

出土遺物　あかやき土器、須恵器、土師器の小破片が出土。

ＲＥ088竪穴建物跡（第22図）

位　　置　北調査区北西　　平面形　方形　　重複関係　なし

規　　模　北西－南東2.95m×南西－北東2.70m　　掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層

埋　　土　自然堆積による。Ａ～Ｃ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを多量に含む。

Ｂ層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを少量含む。

Ｃ層―黄褐色シルトを主体とし、粒状の黒褐色土を少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.32～0.37mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。北東側に直径1.15mの周囲に高まりを持つ土坑が掘り込まれている。

出土遺物　あかやき土器、土師器の小破片が出土。

ＲＥ089竪穴建物跡（第23図）

位　　置　北調査区西側　　平面形　不整形　　重複関係　ＲＡ655を切る。

規　　模　北西－南東3.87m×南西－北東2.24m　　掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層

埋　　土　自然堆積による。Ａ～Ｃ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微量に含む。

Ｂ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量と、焼土を微量に含む。

Ｃ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトと焼土を少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.14～0.24mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。

出土遺物　あかやき土器、須恵器、土師器の小破片が出土。

ＲＥ090竪穴建物跡（第23図）

位　　置　北調査区中央　　平面形　方形　　重複関係　なし

規　　模　北西－南東2.55m×南西－北東1.83m　　掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを多量に、黒色土を少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.18～0.26mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。構築土（L層）は、黄褐色シルトを主体に粒～塊状の黒褐色土を多量に含み、厚さは0.07～0.24mである。

出土遺物　あかやき土器、土師器、須恵器の小破片が出土。

ＲＥ091竪穴建物跡（第24図）

位　置　北調査区中央　　**平面形**　不整方形　　**重複関係**　ＲＤ2157を切る。

規　模　南北2.80m×東西2.70m　　**掘込面**　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少～多量含む。３層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.17～0.24mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。

柱　穴　床面から２口のピットを検出した。それぞれの床面からの深さはＰ１－0.12m、Ｐ２－0.09mである。

出土遺物　あかやき土器、土師器の小破片が出土。

ＲＥ092竪穴建物跡（第24図）

位　置　南調査区中央　　**平面形**　方形　　**重複関係**　ＲＧ607を切り、ＲＥ093に切られる。

規　模　北西－南東3.20m×南西－北東1.16m　　**掘込面**　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　人為堆積による。黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを多量に、黒色土を微量に含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.34mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。

出土遺物（第25図11～13）　11は須恵器の坏で、底部は回転糸切りの無調整である。12はあかやきの坏である。13は土師器の坏で摩滅により内側の調製痕は不鮮明である。

ＲＥ093竪穴建物跡（第24図）

位　置　南調査区南東　　**平面形**　円形　　**重複関係**　ＲＥ092を切る。

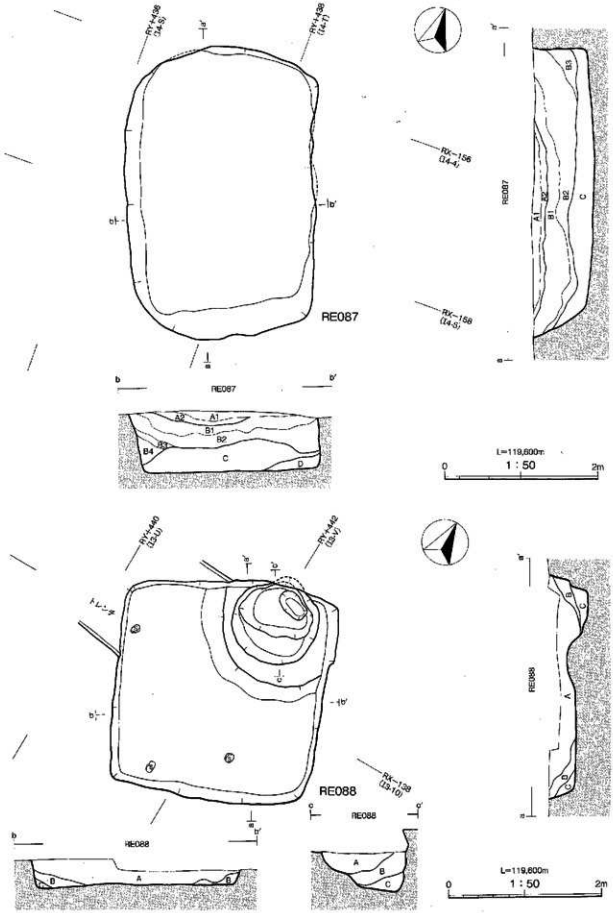
規　模　北西－南東3.14m×南西－北東1.79m　　**掘込面**　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを微量に含む。２層に細別される。

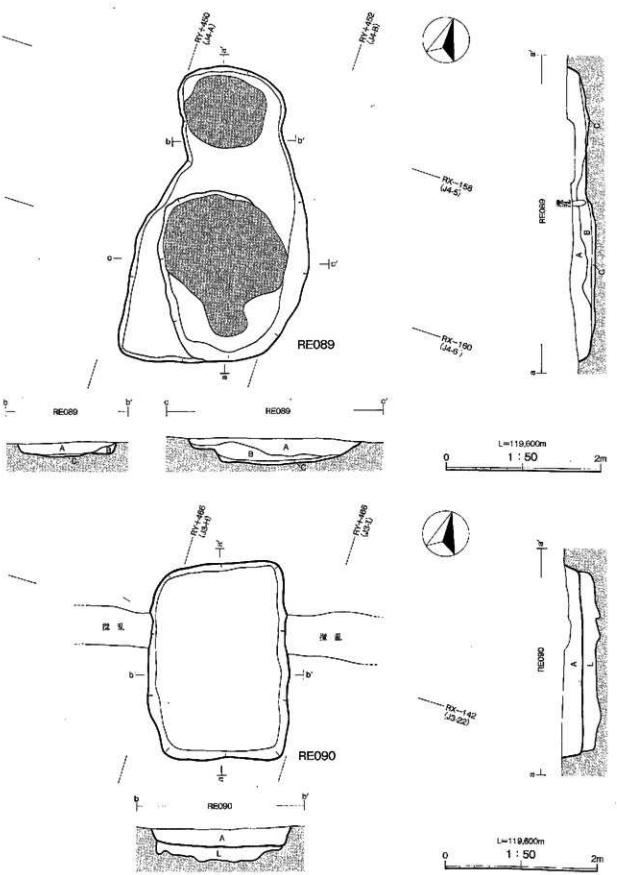
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.05m～0.10mで、外傾して立ち上がる。

床の状態　床面はほぼ平坦である。

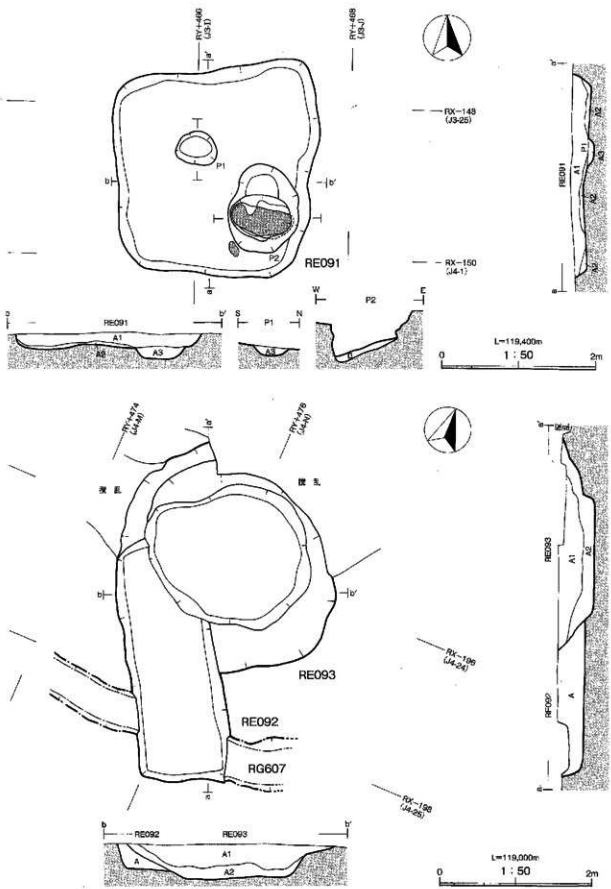
出土遺物　須恵器、あかやき土器、土師器の小破片が出土。



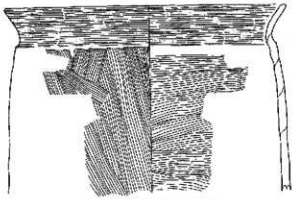
第22図　ＲＥ087・088竪穴建物跡



第23図　ＲＥ089・090竪穴建物跡

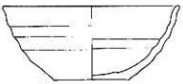


第24図　ＲＥ091・092・093竪穴建物跡



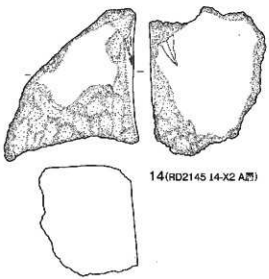
10(RA660 J5-I3 旧煙道 La層)

11(RE092 J5-M1 A層)

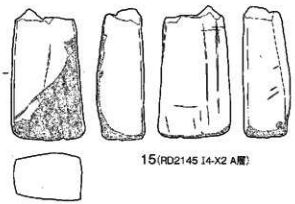


12(RE092 J5-M1 A層)

13(RE092 J5-M1 A層)



14(RD2145 I4-X2 A層)



15(RD2145 I4-X2 A層)

0 1:3 10cm

第25図　ＲＡ660竪穴住居跡（２）、ＲＥ092竪穴建物跡、ＲＤ2145土坑出土遺物

5．古代以降の遺構・遺物

ＲＢ140掘立柱建物跡（第26図）

位　　置　北調査区北西　　**平 面 形**　桁行２間・梁間１間の東西棟

重複関係　なし　　**掘 込 面**　削平

検 出 面　暗褐色シルト層　　**規　模**　東西２間（3.97m・13尺）・南北１間（1.75m・５尺８寸）

棟 方 向　Ｐ１とＰ３を通る柱筋でＥ17°Ｎ

柱間寸法　桁行柱間は平均1.90m（６尺３寸）である。北側柱筋はＰ１・２間1.98m（６尺５寸）、Ｐ２・３間1.92m（６尺３寸）をはかる。南側柱筋はＰ４・５間2.15m（７尺１寸）、Ｐ５・６間1.82m（６尺）をはかる。梁間柱間は1.80m（５尺９寸）である。

柱　　穴　全ての柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.18～0.31m、掘方径は0.42～0.56mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（Ａ層）、掘方（Ｂ層）ともに黒褐色土を主体とし、Ｂ層には黄褐色シルトが粒状に混入する。各柱穴の深さは次の通りである。Ｐ１－0.34m、Ｐ２－0.42m、Ｐ３－0.50m、Ｐ４－0.37m、Ｐ５－0.44m、Ｐ６－0.42m。

出土遺物　なし

ＲＤ2142土坑（第27図）

位　　置　北調査区北西　　**平 面 形**　円形　　**重複関係**　なし　　**規　模**　直径1.22m

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.13mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　なし

ＲＤ2143土坑（第27図）

位　　置　北調査区西　　**平 面 形**　円形　　**重複関係**　なし　　**規　模**　直径0.54m

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層上

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと焼土を微量に含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.12mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　土師器の小破片が出土。

ＲＤ2144土坑（第27図）

位　　置　北調査区西　　**平 面 形**　長方形　　**重複関係**　なし

規　　模　長軸1.80m、短軸0.96m

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト層

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.08mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。構築土（Ｌ層）は、黒褐色土を主体に粒～塊状の黄褐色シルトを微量に含み、厚さは0.16mである。

出土遺物　土師器の小破片が出土。

RD2145土坑（第27図）

位　置　北調査区西側　平面形　不整円形　重複関係　なし

規　模　長軸2.33m、短軸1.83m

掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層

埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量と焼土を微量に含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.08mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。構築土（L層）は、黒褐色土を主体に粒～塊状の黄褐色シルトを多量に含み、厚さは0.14mである。

出土遺物（第25図14・15）　14・15は砥石である。14は二面を使用し、材質は火山岩質安山岩である。15は四面を使用し材質は凝灰岩である。

RD2146土坑（第27図）

位　置　北調査区北西　平面形　楕円形　重複関係　なし

規　模　長軸1.39m、短軸1.03m

掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層

埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量～大量に含む。2層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.12mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　土師器の小破片が出土。

RD2147土坑（第27図）

位　置　北調査区北西　平面形　楕円形　重複関係　なし

規　模　長軸1.43m、短軸0.66m（撹乱により削平）

掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層

埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.14mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　土師器の小破片が出土。

RD2148土坑（第27図）

位　置　北調査区中央西　平面形　方形　重複関係　RG608に切られる。

規　模　長軸1.66m、短軸1.21m

掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層

埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.07mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　なし

ＲＤ2149土坑（第27図）

位　　置　北調査区中央西　　平 面 形　楕円形　　重複関係　ＲＧ608に切られる。

規　　模　長軸2.03m、短軸1.37m

掘 込 面　削平　　検 出 面　黄褐色シルト層

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを微量～少量含む。２層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.36mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　あかやき土器、土師器の小破片が出土。

ＲＤ2150土坑（第27図）

位　　置　北調査区中央　　平 面 形　方形　　重複関係　ＲＧ608に切られる。

規　　模　長軸1.52m、短軸1.06m

掘 込 面　削平　　検 出 面　黄褐色シルト層

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを少量含む。２層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.11mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　なし

ＲＤ2151土坑（第28図）

位　　置　北調査区中央　　平 面 形　楕円形　　重複関係　なし

規　　模　長軸1.12m、短軸0.87m

掘 込 面　削平　　検 出 面　黄褐色シルト層

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.11mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　なし

ＲＤ2152土坑（第28図）

位　　置　北調査区中央　　平 面 形　方形　　重複関係　なし

規　　模　長軸1.70m、短軸1.60m

掘 込 面　削平　　検 出 面　黄褐色シルト層

埋　　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを微量～少量含む。２層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.17mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

燃 焼 部　火床面は0.76×0.15mの不整形で、浸透層の厚さは0.02mである。

出土遺物　あかやき土器、土師器の小破片が出土。

ＲＤ2153土坑（第28図）

位　　置　北調査区中央　　平 面 形　円形　　重複関係　なし

規　　模　長軸1.10m、短軸0.91m

掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　A層は黒褐色土を主体に粒～塊状の褐色シルトを少量含む。2層に細別される。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.15mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　なし

RD2154土坑（第28図）
位　置　北調査区中央　　平面形　楕円形　　重複関係　RD2155に切られる。
規　模　長軸0.77m、短軸0.62m
掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。2層に細別される。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.25mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　なし

RD2155土坑（第28図）
位　置　北調査区中央　　平面形　円形　　重複関係　RD2154を切る。
規　模　長軸1.60m、短軸1.40m
掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトと塊状の黒色土を少量含む。3層に細別される。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.37mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　あかやき土器、土師器の小破片が出土。

RD2156土坑（第28図）
位　置　北調査区中央　　平面形　長方形　　重複関係　なし
規　模　長軸1.83m、短軸1.23m
掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを多量に含む。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.13mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　なし

RD2157土坑（第28図）
位　置　北調査区中央　　平面形　円形　　重複関係　RE091に切られる。
規　模　長軸1.15m、短軸0.65m
掘込面　削平　　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少～多量含む。2層に細別される。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.20mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　なし

ＲＤ2158土坑（第28図）
位　置　北調査区北東　平面形　円形　重複関係　なし
規　模　長軸1.38m以上、短軸1.36m
掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。２層に細別される。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.42mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　須恵器、土師器の小破片が出土。

ＲＤ2159土坑（第28図）
位　置　北調査区北　平面形　楕円形　重複関係　ＲＧ609を切る。
規　模　長軸2.28m、短軸0.83m
掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトと粒土を少量含む。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.22mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　なし

ＲＤ2160土坑（第28図）
位　置　北調査区中央　平面形　円形　重複関係　なし
規　模　長軸1.25m、短軸1.07m
掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを少～多量に含む。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.35mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　土師器の小破片が出土。

ＲＤ2161土坑（第29図）
位　置　南調査区西　平面形　楕円形　重複関係　なし
規　模　長軸2.94m、短軸1.38m
掘込面　削平　検出面　黄褐色シルト層
埋　土　自然堆積による。Ａ～Ｄ層に大別される。
Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトと粒状の黒色土を少量含む。
Ｂ層―黒褐色土を主体とし、粒状の黒色土を少量と粒状の黄褐色シルトを微量に含む。
Ｃ層―暗褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトと粒状の黒色土を少量含む。
Ｄ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトと粒状の黒色土を少量に含む。４層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.48mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　土師器の小破片が出土。

ＲＤ2162土坑（第29図）

位　置　南調査区西　　**平面形**　不整楕円形　　**重複関係**　なし
規　模　長軸1.62m、短軸1.13m
掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層上面
埋　土　自然堆積による。Ａ～Ｂ層に大別される。
Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の明黄褐色シルトを少量含む。
Ｂ層―褐色シルトを主体とし、粒～塊状の黒褐色土と粒状の黄褐色シルトを少量含む。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.30mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　あかやき土器、須恵器、土師器の小破片が出土。

ＲＧ606溝跡（第４・29図）

位　置　北調査区北側　　**平面形**　南西から北東にのびる。　　**重複関係**　ＲＧ607を切る。
規　模　長さは総延長29.40mをはかり、幅は上端0.32m～0.84m・下端0.18m～0.52mをはかる。
掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層
埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを微～多量に含む。２層に細別される。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.14m～0.26mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　須恵器、土師器の小破片が出土。

ＲＧ607溝跡（第４・29図）

位　置　調査区西側　　**平面形**　北西から南東にのびる。
重複関係　ＲＡ658・ＲＥ092を切り、ＲＧ606・ＲＧ611に切られる。
規　模　長さは総延長78.60mをはかり、幅は上端0.46m～1.24m・下端0.30m～1.06mをはかる。
掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層
埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを微～多量に含む。３層に細別される。
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.04m～0.38mで、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物（第30図１・２）　１は凹石で、二面を砥面として使用している。２は砥石で、材質は火山岩質安山岩である。二面を使用している。

ＲＧ608溝跡（第４・29図）

位　置　北調査区中央　　**平面形**　隅丸方形　　**重複関係**　ＲＡ654・ＲＤ2148・ＲＤ2150を切る。
規　模　長さは総延長28.40mをはかり、幅は上端0.42m～0.80m・下端0.26m～0.60mをはかる。
掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層
埋　土　Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色シルトを微～少量含む。３層に細別される。Ａ

3層は人為堆積と考えられる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.06m～0.22mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物（第30図3～7・第31図）　3～7はロクロ成形のかわらけである。1は台石である。三面を整形しており、表面にはコゲが付着している。

ＲＧ609溝跡（第4・29図）

位　置　北調査区東側　　**平面形**　北西から南東にのびる。　　**重複関係**　ＲＤ2159に切られる。

規　模　長さは総延長約24mをはかり、幅は上端1.06m～1.86m・下端0.76m～1.04mをはかる。

掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　A層―黒褐色土を主体とし、粒～塊状の濃黒褐色土を少量と粒状の黄褐色シルトを微量に含む。4層に細別される。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.26m～0.45mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　土師器の小破片が出土。

ＲＧ610溝跡（第4・29図）

位　置　南調査区南西　　**平面形**　北西から南東にのびる。　　**重複関係**　なし

規　模　長さは総延長6.50mをはかり、幅は上端0.30m～0.50m・下端0.16m～0.30mをはかる。

掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　A層は黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを少量と明黄褐色シルトを微量に含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.10mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　なし

ＲＧ611溝跡（第4・29図）

位　置　南調査区南東　　**平面形**　北東から南西にのびる。　　**重複関係**　ＲＧ607を切る。

規　模　長さは総延長11.30mをはかり、幅は上端0.50m～0.88m・下端0.28m～0.58mをはかる。

掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　A層は黒褐色土を主体に粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。

壁の状態　底面までの深さは0.06m～0.10mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物　須恵器、あかやき土器、土師器の小破片が出土。

ＲＦ073焼土遺構（第29図）

位　置　北調査区東側　　**平面形**　円形　　**重複関係**　なし

規　模　0.62m×0.53m

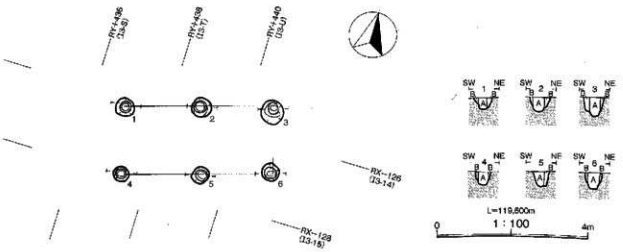
掘込面　削平　　**検出面**　黄褐色シルト層

埋　土　A層―赤褐色焼土を主体とし、粒～塊状の明赤褐色焼土を含む。

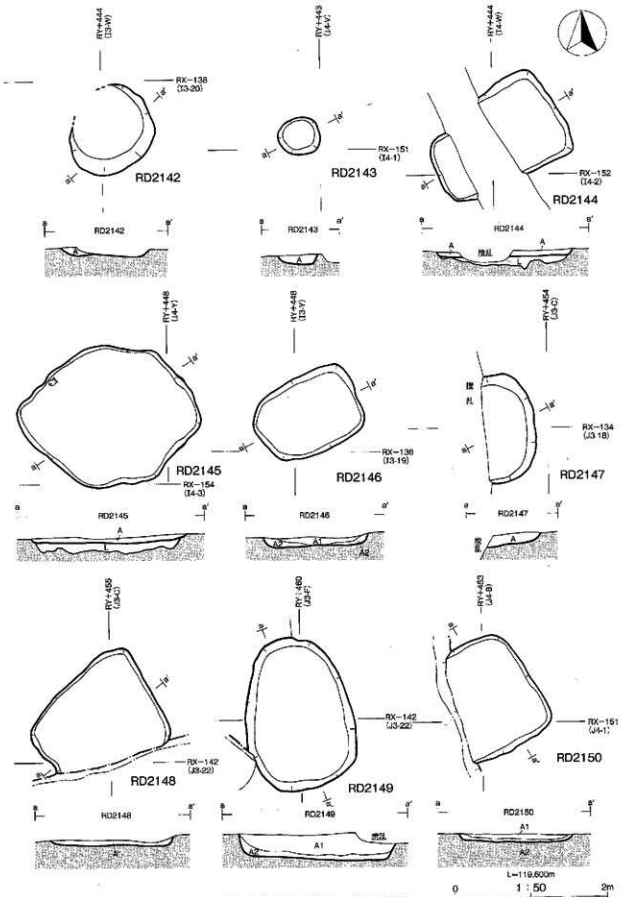
壁の状態　検出面から床面までの深さは0.30mで、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態　ほぼ平坦である。
出土遺物　　なし

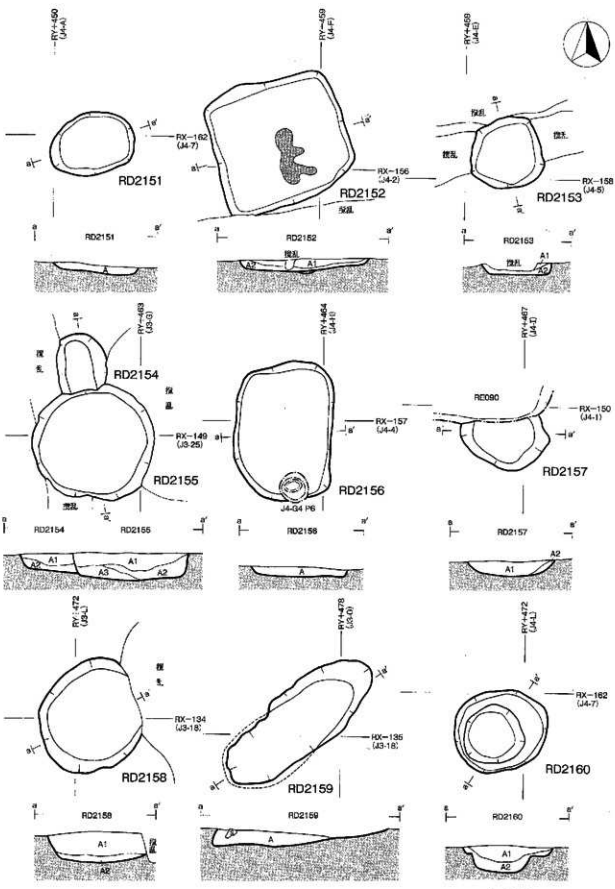
ピット群（第4・29図）　ピットは調査区内から6口（Ｐ１～Ｐ６）検出されている。埋土は黒褐色土を主体として粒～塊状の黄褐色シルトを少量含む。Ｐ６には柱痕跡が認められる。いずれのピットからも、遺物等は出土していない。以下、ピットの深さである。Ｐ１－0.33m、Ｐ２－0.44m、Ｐ３－0.27m、Ｐ４－0.32m、Ｐ５－0.20m、Ｐ６－0.25m。



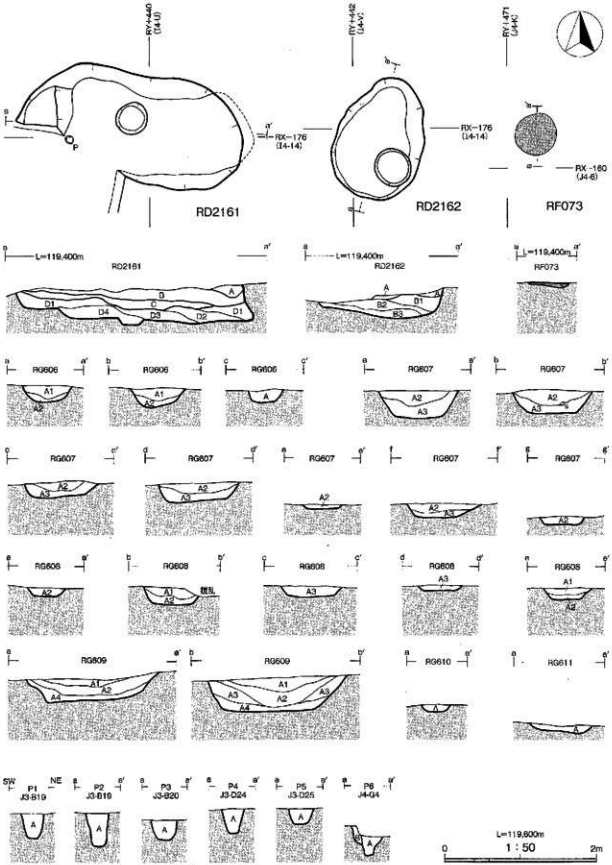
第26図　ＲＢ140掘立柱建物跡



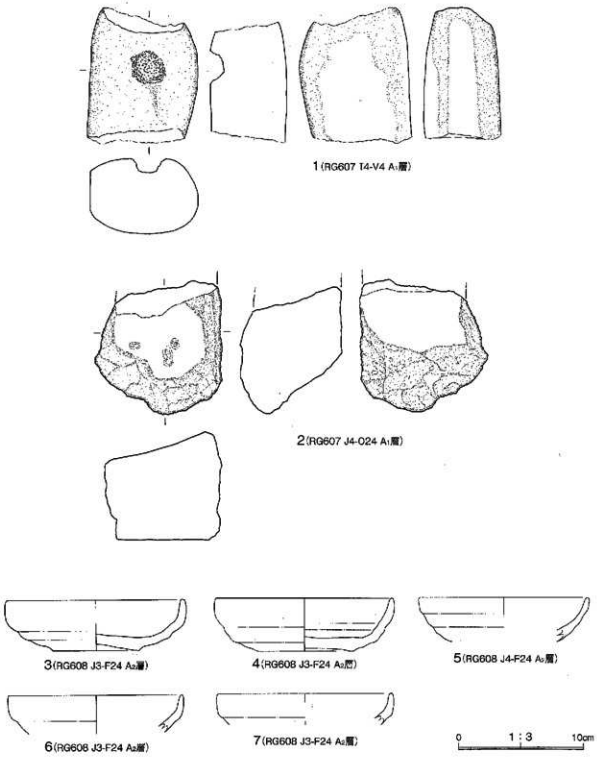
第27図　ＲＤ2142～2150土坑



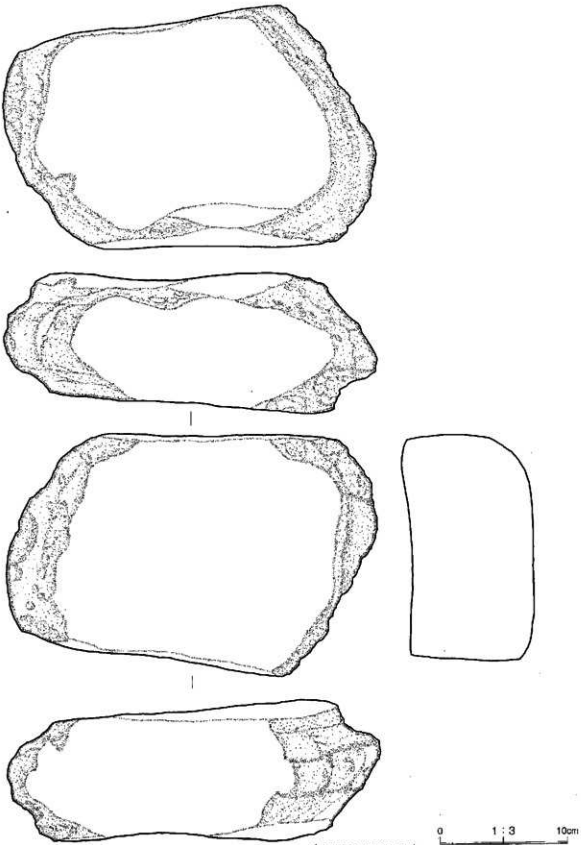
第28図　ＲＤ2151～2160土坑



第29図　ＲＤ2161・2162土坑、ＲＦ073焼土遺構、
ＲＧ606～611溝跡、ピット１～６



第30図　R G607・608溝跡出土遺物（1）



第31図　ＲＧ608溝跡出土遺物（２）

Ⅲ．総括

検出遺構　台太郎遺跡第73次調査では、平安時代の竪穴住居跡８棟、竪穴建物跡７棟、土坑21基、溝跡４条、焼土遺構１基、中世の溝跡１条、時期不明の掘立柱建物跡１棟、溝跡１条が検出された。

竪穴住居跡　平安時代の竪穴住居跡は、いずれの住居跡もカマド基底部は残存しておらず、住居廃棄の際に解体されたものと考えられる。ＲＡ660竪穴住居跡の煙道内には、土師器の坏や甕などが意図的に廃棄されており、住居廃棄時の祭祀行為に関わるものと考えられる。カマドが２時期にわたる竪穴住居跡は４棟（ＲＡ656・657・658・660）で、カマドの付け替えの際に住居の規模を拡大しているものは２棟（ＲＡ656・660）である。ほとんどの竪穴住居跡のカマドの向きは北西方向に向いており、これまで台太郎遺跡で確認されている平安時代の竪穴住居跡の傾向と相違は見られない。ただ、１辺が７ｍを超える大型住居の割合が多い傾向にある。遺構の年代は出土している土器から概ね９世紀後半～10世紀が想定される。

竪　穴　跡　カマドを持たない竪穴建物跡は６棟確認されているが、平面形や深さに相違があり用途は一定でないと考えられる。唯一、遺物が出土しているＲＥ092竪穴建物跡は平面形が長方形を呈し、埋土は人為堆積であるが、やはり用途・性格等は不明である。

掘立柱建物跡　ＲＢ140掘立柱建物跡は北調査区の北西隅で確認されている。Ｌ字状に屈曲するＲＧ606溝跡の内側に位置し、溝跡の延伸と棟方向が並行していることから、何らかの関連性があると考えられるが、遺物が出土していないため時期については不明である。

土　　坑　土坑のタイプは多岐にわたり、個々の用途は異なっていると考えられる。埋土に焼土が含まれているものも認められるため、火を使用した用途も考えられるが、遺物が出土していないため詳細は不明である。

溝　　跡　ＲＧ606溝跡は地形に沿わず、Ｌ字状に屈曲していることから、何らかの区画溝と考えられる。その他の溝跡は、北西―南東方向の沢状地形に沿う、または低みに向かって延伸している。ＲＧ608溝跡は隅丸方形を呈し、平安時代の竪穴住居跡よりも掘り込みが新しい。同様の遺構は市内では、台太郎遺跡第26次調査や、西側に隣接する飯岡沢田遺跡第３次調査でも確認されている。県内では奥州市杉の堂遺跡から東側に開口部を持ち、12世紀後半のかわらけをともなう方形周溝が確認されている。いずれの報告でも祭祀・儀礼に関わる遺構、あるいは周溝を持つ墳墓が想定されている。

かわらけ　ＲＧ608溝跡も埋土中より、かわらけが出土している。器高が低く、口径幅が長い、所謂ロクロかわらけの大皿の様相を呈する。また、体部から口縁部にかけて屈曲して直線的に立ち上がる特徴がある。12世紀代のロクロかわらけとは異なる特徴から、13世紀以降の年代が想定される。周溝内部には明確な建物跡等は確認されなかったが、これまでの類似例との比較や、かわらけが出土していることから、祭祀・儀礼等に関わる施設であった可能性が高い。

線　刻　画　ＲＡ654竪穴住居跡出土の須恵器大甕（第17図10・11、第２図版）の頸部には、絵画的な文様を描いた線刻画が施されていた。口縁部直下には横位の鋸歯文が施されている。大甕口縁部は部分的にしか復元できなかったため、線刻画も連続して描かれているかどうかは確認できなかったが、線刻面は３箇所に認められた。10の須恵器には２箇所に線刻が施されているが、左の線刻は植物の葉あるいは鳥の羽根を表現しているかのように見受けられる。右の線刻は動物のように見えるが欠損部分が大きく全体像は不明である。11の線刻画は一見すると魚類の様にも見えるが、

背びれ・尾びれにあたる部分の表現が、鱗の写実的な表現に比べると稚拙で不正確であるため、魚類以外の植物などを表現した可能性も考えられる。

このような絵画的文様を描く遺物の出土例は、全国的には弥生時代の土器・銅鐸や古墳の壁画などに見受けられる。古代になると須恵器などに所謂ヘラ記号などの線刻文が施されるが、絵画的要素を持つ線刻文の出土例は少ない。県内では花巻市座敷遺跡で土師器の甕きカマドに水鳥を描いた例がある。県外の事例では、宮城県多賀城跡からは、植物のような線刻画を描いた円面硯が確認されている。また、線刻画を描いた瓦なども出土している。秋田県払田柵跡では、竪穴状遺構から出土した渤海系と考えられる土器の口縁部に線刻画が描かれているが、モチーフは不明である。青森県笹森館遺跡では器面に馬を描いている土師器の小形壺が出土している。

全ての出土例を網羅したわけではないが、線刻画の全体像が掴めるものは少なく、ほとんどは破片資料が多いようである。

今回、第73次調査で出土した線刻画のモチーフについての解釈は、部分的であることと、全国的にみてもこの時期の出土事例が少ないことから推測の域を出ないものである。本報告書では事実報告のみに留め、今後の資料の増加・蓄積によって明らかになることを期待したい。

遺構分布　台太郎遺跡はこれまでに70次を超える調査が実施されてきたが、その多くは遺跡西部～中央部が大多数を占めていた。今回の第73次調査および71次試掘調査では多数の遺構・遺物が確認され、遺跡東縁部においても中央部と遜色のない密度であることが明らかとなった。

【参考文献】

秋田県教育委員会 2004『払田柵跡　第122次～124次調査概要』秋田県文化財調査報告書第379集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『摩耶遺跡発掘調査報告書　担い手育成基盤整備事業関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第302集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書　盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書　盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『飯岡沢出遺跡第3次発掘調査報告書　盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第418集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『移の堂遺跡発掘調査報告書　国道4号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第425集

杉沢明太郎 1998「岩手県における中世後半のかわらけ様相」『紀要XII』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

杉沢明太郎 2003「中世の盛岡市南中野一向中野館・台太郎遺跡の発掘調査から一」『紀要XXII』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

平泉町教育委員会 1996『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第51集

弘前市教育委員会 2008『笹森館遺跡発掘調査報告書　個人による展地造成に伴う遺跡発掘調査』

宮城県教育委員会 1980『多賀城跡 政庁跡 図録編』

写 真 図 版

北側調査区　全景

南側調査区　全景

線刻画須恵器　No.１

No.１線刻画部分（１）

No.１線刻画部分（２）

線刻画須恵器　No.２

No.２線刻画部分

ＲＡ653竪穴住居跡

ＲＡ654竪穴住居跡

ＲＡ655竪穴住居跡

ＲＡ656竪穴住居跡

ＲＡ657竪穴住居跡

ＲＡ658竪穴住居跡

ＲＡ659竪穴住居跡

ＲＡ660竪穴住居跡

第４図版

ＲＥ087竪穴建物跡

ＲＥ088竪穴建物跡

ＲＥ089竪穴建物跡

ＲＥ090竪穴建物跡

ＲＥ091竪穴建物跡

ＲＥ092・093竪穴建物跡

ＲＢ140掘立柱建物跡

ＲＧ608溝跡

台太郎遺跡第73次調査出土　土器群

ＲＧ608溝跡出土　かわらけ

台太郎遺跡第73次調査出土　刀子・苧引鉄・紡錘車・石製品・耳皿

台太郎遺跡第73次調査出土　砥石・搗臼

報告書抄録

ふりがな	だいたろういせき
書名	台太郎遺跡
副書名	「フローラルアベニュー向中野」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐々木亮二　三品花菜子
編集機関	盛岡市　遺跡の学び館
所在地	〒020－0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1　TEL019－635－6600
発行機関	惣清倉庫株式会社　盛岡市教育委員会
発行年月日	2012年5月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
台太郎遺跡（だいたろういせき）	岩手県盛岡市（いわてけんもりおかし）向中野一丁目（むかいなかのいっちょうめ）15番、16番12（ばん）ほか	3201		39°40′57″	141°08′19″	（第73次）2011.05.09～2011.07.21	4,360	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
台太郎遺跡（第73次調査）	集落跡	平安時代	竪穴住居跡	8	土師器 須恵器 あかやき土器 耳皿 かわらけ 刀子 紙石	平安時代の竪穴住居跡から、線刻画が施された須恵器の甕が発見された。
			竪穴建物跡	7		
		古代以降	土坑	21		
			焼土遺構	1		
			溝跡	4		
		中世	溝跡	1		
		時期不明	掘立柱建物跡	1		
			溝跡	1		

要約

調査の結果、遺跡中央部と同様の遺構・遺物が確認され、中央部と遜色のない遺構分布であることが判明し、これまで調査事例の少なかった台太郎遺跡東縁部の様子が明らかになった。また、絵画文が線刻された須恵器大甕の発見は、盛岡周辺では初見である。

かわらけを伴う方形の溝は県内各地でも確認されているが、具体的な用途・性格が明らかにはされておらず、資料の増加・蓄積とともに今後の調査・研究が期待される。

台太郎遺跡

―「フローラルアベニュー向中野」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書―

2012年5月31日　発行

編　集　盛岡市遺跡の学び館
〒020－0866　盛岡市本宮字荒屋13番地1
℡019－635－6600
発　行　都南倉庫株式会社　盛岡市教育委員会
印　刷　株式会社　吉出印刷
〒020－0016　盛岡市名須川町23番地27号
℡019－625－2323